

国立国語研究所学術情報リポジトリ

〈受賞紹介〉 町名のアクセント：
アクセントの平板化と言語内的要因

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2015-10-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 儀利古, 幹雄 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00000744

日本言語学会では、研究大会における若手会員の口頭発表・ポスター発表の中から特に優れた発表に対して「日本言語学会大会発表賞」を授与しています。儀利古氏の発表は、日本語の「町」を含む複合名詞のアクセントが、前部要素のモーラ長や音節構造によって決定されることを明らかにした研究であり、調査により主張を計量的に裏付けた点および発表の仕方や質疑応答が優れていると評価され、第144回大会の発表賞を受賞しました。

受賞対象 儀利古幹雄「町名のアクセント：アクセントの平板化と言語内的要因」
(日本言語学会第144回大会：2012年春季、東京外国語大学)

町名のアクセント：アクセントの平板化と言語内的要因

儀利古 幹雄

本研究は、(i)「泉町(いずみちょう)」「東城町(とうじょうちょう)」のような、「町(ちょう)」を後部要素(以下、N2)とする複合名詞(以下、町名)のアクセントが、前部要素(以下、N1)のモーラ長と音節構造によって決定されていること、(ii)30~50歳のインフォーマントと比較して10~20歳のインフォーマントは、町名を平板型アクセントで発音する傾向が強くなっていること、(iii)町名のアクセントの平板化には、言語外的要因のみならず言語内的要因が強く影響を及ぼしていること、以上の3点を明示することを主要な目的とする。

N1が3モーラ以上でありN2が2モーラ漢語である複合名詞アクセントには、①N1の最終音節にアクセント核が付与される型(以下、前部最終ア)(例：えいがかん(映画館)、にほんかい(日本海)([']はアクセント核を表す))と②平板型アクセント(以下、平板ア)(例：にいがたさん⁰(新潟産)、とやままい⁰(富山米)([⁰]は平板型アクセントを表す))の2つがある。また、上記のような複合名詞のアクセントは原則的にN2によって決定されるため、N2が同一であれば生起するアクセント型は一貫している(例：えいがかん(映画館)、はくぶつかん(博物館)、びじゅつかん(美術館)；とやまさん⁰(富山産)、にいがたさん⁰(新潟産)、かなださん⁰(カナダ産))。しかし、町名のアクセントはこの限りではない。つまり、N2が同一の「町(ちょう)」であるのに、前部最終アも平板アも生起しうる(例：はままつちょう(浜松町)；きんしちょう⁰(錦糸町)(JRのアナウンスより))。ここで、町名のアクセントは何によって決まっているのかという疑問が生じる。どのような条件下で前部最終アが生起し、どのような条件下で平板アが生起するのかという問題である。この問題を解明するために本研究では、東京方言話者に対する発話調査を行った。

インフォーマントは東京方言話者20名(10~20歳：9名；30~50歳：11名)である。調査語は実在の町名90語であり、N1のモーラ長と音節構造によって9タイプに分けられる(LL

町, LLL 町, HL 町, LH 町, LLLL 町, HLL 町, LLH 町, HH 町, および N1 が 5 モーラ以上の町名 (L は軽音節を, H は重音節を表す)。これらの語を無作為に並べた調査語表を作成し, インフォーマントに提示して各語につき 2 回発音してもらい, 調査者がアクセントを聞き取るというのが調査の手順である。3~4 モーラの町名の結果を以下に示す (点のバーが 10~20 歳の, 斜線のバーが 30~50 歳の平板ア生起頻度を表す)。

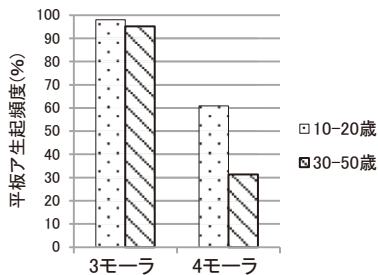


図1 モーラ長と平板ア生起頻度

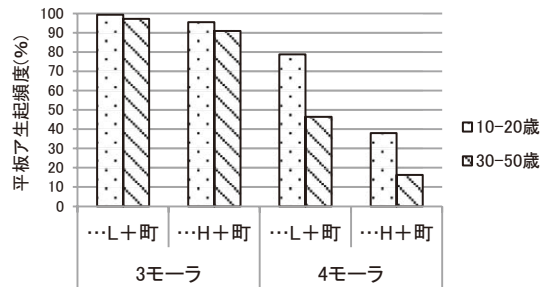


図2 N1 末尾の音節構造, モーラ長と平板ア生起頻度

まず, 世代を超えた傾向性を考察する。図1より, 世代にかかわらず N1 が 3 モーラの場合 (例: 山田町) は 4 モーラの場合 (例: 浜松町) と比較して平板ア生起頻度が著しく高いことがわかる (10~20 歳: 98.1%; 30~50 歳: 95.2%)。続いて図2からは, N1 が 4 モーラの場合において, N1 末尾の音節構造が L の場合は H の場合より平板ア生起頻度が高いことがわかる (10~20 歳: 78.9%; 30~50 歳: 46.4%)。これも世代を超えて観察される傾向である。なお, N1 が 2 モーラ (例: 和田町) および 5 モーラ以上の場合 (例: 三宮町) は, 世代にかかわらずほぼすべて前部最終アで発音された。以上のことより, 町名のアクセントは, N1 のモーラ長や音節構造に強く影響を受けて決定されていると言える。次に世代差に注目して考察する。図1からは, N1 が 4 モーラの場合に世代差が顕著に観察されることが見て取れる (10~20 歳: 60.9%; 30~50 歳: 31.4%)。さらに図2からも同様の傾向が観察される。以上のことから, 30~50 歳のインフォーマントと比較して 10~20 歳のインフォーマントは, 町名を平板型アクセントで発音する傾向が強くなっていると言える。これらの結果を総合的に勘案すると, 町名のアクセントの平板化は N1 が 3 モーラである町名から始まったのではないかと推測できる。また, N1 が 4 モーラである町名でも平板化が進行しているが, N1 末尾の音節構造が H のものの進行は最も遅いと推測される。つまり, 世代が若くなればどのような町名でも一律に平板化するというわけではない。アクセントの平板化という言語変化現象の進行には, 従来言われていたような言語外的要因 (例: 年齢) のみならず, 言語内の (構造的) 要因も強く影響を及ぼすのである。

儀利古 幹雄 (ぎりこ・みきお)

日本学術振興会特別研究員（国立国語研究所所属）。博士（文学）（神戸大学）。国立国語研究所プロジェクト研究員（日本語レキシコンの音韻特性）（2010年5月～2013年3月）を経て、2013年4月より現職。

主な著書・論文：On the positional asymmetry of consonant gemination in Japanese loanwords（共著，*Journal of East Asian Linguistics* 21(4), 2013），「語末が「ズ」であるチーム名・グループ名のアクセント分析」（『国立国語研究所論集』2, 2011），「日本語における疑似複合構造と平板型アクセント—語末が /Cin/ である外来語のアクセント分析—」（『音韻研究』14, 2011）。